

『娘の死』

菅沼
剛樹

バーナード卿はただ、迷う。半刻も前から一向に食は進んでいない。

あどき意地でも彼を引き留め、娘を娶らせればよかった。しかしそれでは意味がないというのも、また、バーナード卿は知っている。それでは、彼は娘と一緒に旅立ってくれるだろうが、結局身も心も離れて行ってしまいうだろう。それなら、声をかけなかったことはよいことだったのか。結果が今の有様だ。ならば……。ただの堂々巡り。ただ、後悔のため息をつくばかり。

こうなることは初めから分かっていた。娘、エレインが外の世界に出るためには信用のたる、高貴な人物である必要があった。政略的なものでは決してない。エレインは弱く、脆い。まるで、雨を草下でしのぐ蝶のように。まるで、彼の亡き妻のように。そんな彼女を守るためには、この強固な城よりも勇壮な人物が必要だった。しかしそんな人物を世間が放っておくはずなからう。そもそも、こんな辺境の地アストラットにたどり着く者は、浮浪者か物好きに相違ない。彼のような人物がそんなところにやってきたのはただの奇蹟だった。それも滅法意地の悪い。

ようやく、彼は美味しくもない羊頭をゆっくり、押し黙って口に入れる。この一週間でどれほど痩せたのだろう。娘はともかく、自分もだいぶここ数日で衰えたと老父は感じていた。

「父上」

テリーが、突如石廊下より音もなく室に入る。「エレインが呼んでおります。」

∴

エレインは、ただ、微笑んでいた。しかし、その両眼は決して父親を見ようとはせず、伏している。桃色の頬は今まで生きてきた中で最も華やかに染まっていた。これは死にゆく者の顔ではない、と思うものの、しかしその躰はどんな重病にかかった時よりも容易く折れてしまいそうにも見える。バーナード卿はそんな彼女の様子をじっ、と見守る。どちらとも声をかけられず、落ちる宵の静寂。

「儂はな、」夜の闇に吸い込まれるような言の葉で、バーナード卿は誰にともなく呟く。「この出会いは失敗に帰するような気がしておったのじゃ。」

「それは、」エレインは言葉を濁す。それは、彼女にもわかっていて。多分、彼があの高潔と名高い騎士と知るよりもっと先に。しかしそれでもなお、彼女は惹かれていた。きっと自分は結ばれない。心のどこかで理解していたにもかかわらず。どうしても彼のそばにいたかった。そのためには、全てを擲ってもいい。そう感じたあの時。一目見たあの一瞬から、彼女の運命は決まっていたのかもしれない。

夏の夜は短い。少しひんやりとした空気の中に、夜の漆黒がそれでもなお今宵は長くなると告げている。そよ風だけが、刻がかすかに流れていくのを記す。月などないすべてを受容する闇の世界。テムズの水音のみ、バーナード卿にうつつであることを実感させる。

「お父様」しばらくしてエレインが父親に声をかけた。バーナード卿は無言のうちに続きを促す。

「私のために一通手紙をしたためてほしいのです。」

「そうか」と父親。彼に宛てるのかという言葉をぐっと飲み込む。

「そして、私が死んだらその手紙を私の右手に握らせて、テムズに流してほしいのです。」と娘は続けた。父親はただ首を縦に振る。

「うつつにも二度は会えじと思えども君によるしろありと想わば」エレインは擦れゆく、けれど夢心地にあるような声で詠った。

「これで良いか」バーナード卿は答えを気にせず独りごちる。多分もう答えは返ってこまい。彼は気が抜けたように、ふうと息をつき、家来に葬送の準備を命じた。

∴

エレインの葬儀は簡単に執り行われた。家族より他に知る者もない、小さくてとても身近な儀式。司祭の声が城の薄暗い礼拝堂に響き、その一句一句にテリーがむせぶ。ある意味でエレインにとってこれが初めて人肌に近い温かみを持った行事かもしれない、そうバーナード卿はひそかに思う。

エレインの頬は死んでなお薄い桃に染まっていた。それはあたかも彼女が生きているように、というよりはむしろ、ただあるべき色合いを映し出しているにすぎないように。この姿を彼に見せてやりたい。彼女への後悔を植え付けるためでなく、ただ美しいその姿を彼女が最も愛した人物に見てもらいたいがために。そう思うと、こんなにも悲痛な儀式のはずなのにバーナード卿の顔にふと笑みがこぼれる。

「もうそろそろ時間です。」司祭の声が静かな空間を裂く。

エレインの細い体は殆ど重さを感じられない。バーナード卿はそのか細いそれを難なく抱え、しかし生まれた時よりそのわずかに増えた体重に驚く。その日幾十目のため息をつき、城を出た。

鼠色の世界だった。今にも落ちてきそうな厚い雲。そのモノトーンの背景に時折映りこむ稲光が、なぜか、娘の死を非現実染める。バーナード卿は自分が最後に外に出たときもこんな天気だったのを思い出し、独り苦笑した。「あの日から何も変わってはおるまい。」そうは思うものの、あの刻よりも少しだけ重くなった体を抱えて、娘の死は

あの時とは全く違うことを認識する。死体とは思えない、ただ眠っているかのような薔薇色の頬。死んでなお取り留める女性の若々しい肉感。それに反して人間としてはあまりに軽い、その体躯。その様子は重々しい空とは対比をなすように、鮮烈で痛々しい。

家来たちが、舟にエレインの寝具を運び込んだあと、バーナード卿は、家来たちが思っていたよりもよほど簡潔に弔いの言葉をかけ、そっと額に口をつけた。小さな小舟に乗る、目を見張るほど美しい処女。その頬はいまだ薄明るく、髪は何人も寄せ付けない黄金色。清潔な白のドレスに身を包んだ彼女は、薔薇の白にその身を沈めている。神聖な空間をしかと見届け、バーナード卿はエレインの体に黒の絹を覆いかぶせた。白木の十字を彼女の胸にそっと掲げて。

司祭が「最後の言葉を」、とバーナード卿に求める。夏にしては少し冷たい風が、島の岸辺を吹き抜ける。その風を老体一身に受け止め、深呼吸を一つして。

そして、彼はただ首を横に振った。「流してください」と息子は赤い目を擦りながら、枯れ始めている声で告げる。その声とともに、よどんだ水面に船が滑り込んでいった。バーナード卿は娘から目を逸らさない。これまで娘にそうしてきたように、逸らさないと決めたあの日から。

エレインは、そして、鈍よりくぐもった水面とは不釣り合いなほど清らかに穏やかに、カメロットの都へと流れていった。その姿が灰と灰の間に溶けて見えなくなるまで

城の者たちは皆、川の低地を通り抜ける風の実に耳を澄ましていた。

風が、強い。嵐になるかと思われた雲の切れ目から日が差し、鳥が光に満たされる。この川の向こうでは大麦が金色の実をつけていることだろう。そろそろ収穫の頃合いか。一度は鉄の臭いがたちこめた土地。そんな黒い土地から、まっさらな世代が育つ。いまやその白は黄金色に変わった。

そうだ。そして、バーナード卿は思う。もう一度彼に会いに行こう。会ってこの土地で取れたビールを片手に二人で飲み明かそう、と。

アーサー王研究会創作文庫

『娘の死』

著者 菅沼 剛樹

2012年 1月 6日 発行

発行人 不破有理

発行所 慶應義塾大学 アーサー王研究会

〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉4-1-1

慶應義塾大学来往舎1階 代表 045-563-1151

©2012 SUGANUMA, Takaki Printed in Japan 非売品